



官
版
國
法
汎
論

下
帙

第
七
冊

2

7保7
5157
8-8



門ワ保
號 5/57
共 8-8

明治六年刊行

イ、カ、ハ、ニ、ホ、リ、著
從五位加藤弘之譯

國法汎論

文部省

下帙第七冊

國法汎論卷之八下目錄

第四款 刑法事務

第五款 政務法事務

第六款 司法ノ疆域○政務法ニ屬スル争

訟

下 目錄

國法汎論
卷之八下
目錄

國法汎論卷之八下

第五編 刑務事務

第四編 刑務事務



國法汎論卷之八下

加藤弘之著

藤弘之譯

第四款

刑法事務

即斷獄事務

第一 中古ノ世ニハ羅馬人種及日耳曼人種ノ各

國共ニ刑法事務ノ施行ヲ三等ニ分テ各其官司

ヲ異ニセリ蓋此制ハ元來獨乙ノ國土人民ノ分

割法ニ由リシ者ナリ乃チ古時獨乙ニテガウフ

ンタリ及ワイレル

按國土ヲ三等ニ分割セシ名

シ、之ヲ數フンタリニ分チ、又フンタリヲノ分割
 中部トシ、更ニ之ヲ數ワイルニ分テリ
 ハ、軍事制度、及司法制度ニ應シテ、設ケシ所ノ法
 ナリ、其後佛國ニ於テモ亦法院ヲ上中下三等ニ
 區分シ、〔按〕即、土地ヲ三等ニ分復タ獨乙ニテモ高
 等〔按〕ホグタイ、院〔按〕法下等ホグタイト、及地頭ノ司法
 局〔按〕封地ヲ受有セル地、若クハ邑クマルノ司法局
〔按〕地頭ノ自ラ立ル者ナリ、若クハ邑クマルノ司法局
 法局ヲ共ニ第三等トナス、トニ區分セリ、○且、罰
 スベキ罪科ヲ其輕重ニ隨テ、三等ニ區分シ、併ニ
 法院ノ職掌ヲモ、三等ニ區分シ、右三等ノ法院ヲ
 之、其處決ヲ分掌セシメタリ、凡真誠ノ傷和罪

ヲ傷リ騷乱ヲ醸スノ罪〔按〕平和實ニ平和安全ヲ
 傷害スル者タルヲ以テ、全ク此罪犯人ノ權利ヲ
 剥奪シテ之ヲ誅戮スルヲ要シ、及ヘル、ブレールヘ
〔按〕大罪ヲ云、下文ノ如キモ、必亦其生命ヲ假サ
 サルヲ要シタリ、故ニ是等ハ總テ高等法院ニ於
 テ、判定處刑シタリキ、而テ此法院ハ、國君ヨリ直
 ニ人命ヲ褫フノ權ヲ以テ、授與セラレタル者ナ
 リキ、又フレールヘル、〔按〕故意ヲ以テ及偷盜ノ如キモ
 法制ヲ毀損スル少ナカラスト雖モ、之ヲ罰スルニ、
 決シテ生命ヲ褫フヲ要セス、唯體刑、ケルペル
 トラフ又ラ

此罪科ニ就テ若シ審理判定等ノ事務ヲ務テ丁
 寧綿密ナラシメ且他ノ拘束ヲ受ケス自由ニ處
 分セシムルヲ要スルキニ於テハ、乃其處分ヲ擔
 士法院ニ托シ、或ハ此罪科甚輕クシテ、殆小罪ニ
 類似スルカ如キキニハ、其處分ヲ以テ警保法院
 ニ托スルナリ、
 但大罪常罪ノ區別ハ、人學ハスト雖モ能ク辨別
 シ得ル者ニシテ、二罪共ニ刑法官ノ本職ニ屬ス、
 是ヲ以テ刑法事務ノ編制ニ就テハ、能ク此區分
 ヲ遵守スルヲ要ス、○去凡此二罪ハ共ニ國家ノ

法制ヲ毀損傷害スル者ナルヲ以テ決シテ唯私
 法ニ背ケル不正ノ行ト為ス可ラス、又唯警保
 官ノ處分ニ屬ス可キ罪科トモ為ス可ラス、實ニ
 國家ノ正義公直ノ旨ヲ毀損スル罪科ト為ス可
 キヲ固ヨリ當然ナリ、故ニ此罪科ニ就テハ訴訟
 法ニ於ケルカ如ク、唯僅ニ毀損セラレタル權利ヲ
 回復スルノミヲ以テ足レリト為ス可ラス、又警
 保法ノ如ク、國家ノ正義公直ノ旨ヲ守護スルヨ
 リハ、殊ニ一般ノ安寧秩序ヲ保護スルノ意ヲ以
 テ、處分ス可ラス、實ニ一旦毀損ヲ受ケタル國家

犯人ノ為ニ其罪ノ宥恕ヲ乞願スルヲアリテ、且、其願意頗ル忠厚ナリト云フニ、國家決シテ之ヲ採用スル能ハス、苟クモ罪犯人アルハ、國家ハ、必、公衆ノ為メ、嚴ニ之ヲ罰シ、以テ其正義公直ノ旨ヲ昭明ニセサル可ラス、○元來治罪審理ハ、決シテ兩個私人ノ相對シ相争フヲ裁判スルカ為ニアラス、實ニ國家其公義正直ノ傷害トナル者ヲ除去シ、更ニ之ヲ昭明ニスル所ノ處分ナリ、是故ニスターツァーントハ獨り罪犯人ノ對手タル者ト思フ可ラス、又唯罪狀ノ疑案起ル所

以、及其確證アル所以ヲ推究呈案スルノミヲ以テ足レリト為ス可ラス、必ス能ク思フ運ラシテ、其罪狀ノ無キ所以、及ヒ罪狀ノ減スル所以等ヲモ、注思考察セサル可ラス、○此官ノ居心苟クモ偏頗ナキヲ要スルハ、實ニ法士ニ同シ、但、此官ハ殊ニ告訴ヲ掌ルヲ以テ、自ラ國家ノ正義公直ノ旨ヲ負荷シ、之ヲ以テ罪犯人ト相對シ相争ヒ、而テ罪犯人ノ對手トナルヲ、其主務トナスヘキ者ナルカ故ニ、其地位タルヤ、法士ニ比スレハ自ラ自在ナル所アリ、是故ニ此官ハ、必ス法院ヨリ分派

シテ、別種獨立ノ官ト為スヲ良シトス、然ルニ中
 古ノ世ニ於テハ、各國專任法士ニ告訴ヲモ兼掌
 セシメシ者多カリキ、此法甚タ不可ナリ、
 スターツアーンワルトナル官ヲ設置セシ濫觴
 ハ、其迹既ニ中古各國ノ諸制度中ニ存ス、則中古
 獨乙ライヒス、タト 按獨乙帝ニ直隸セシ土地
 異ナリ、地ト相ノナリフゲンゲル、及ナリフリヒテルノ
 如キ官、又瑞典ノコローンヘグトノ如キ官、此官
 法士ノ未タ審理ヲ施サハルニ方リテ、預メ査問
 ヲ施スヲモ掌レリ、并ニ佛國ノプロキュートル、

ウ、ロアノ如キ官此官ハ、元來羅馬ノアドホカチ、
 ヒスキノ如ク、王室所有地ノ事ニ就テ、告訴ヲ掌
 ル者ナリシカ、又他事ニ就テ、私訴ヲ為ス者アラ
 サルキニ於テハ、其告訴ヲモ兼掌シタリキ、ハ皆
 スターツアーンワルトノ萌芽ノ如クナル者ナ
 リキ、○去、氏實ニ此官ノ制ヲ、完全ノ者ト為シタ
 ルノ功ハ、全ク佛國ニ在リ、那破倫第一世、始メテ
 ゲ子ラールプロクラートル按スターツアーン
 ト稱スル官ヲ設置シ、之ヲ司法省ト合シテ、告訴
 ヲ掌ラレメ且之ニゲ子ラールアドホカト按即チ

ラ補助スルノ官ナリ、ナル官吏數負ヲ附属セ
 リ、尔来他各國ニ於テモ、漸ク佛國ニ倣テ、此官ヲ
 設置スルニ至レリ、但佛國ニテハ、此官ノ權力過
 大ニレテ、殆法院ノ右ニ出ルノ弊ヲ生ヤレニ、他
 各國ニ於テハ、却テ能ク此弊ヲ避クルヲ得タリ、
 第三英國擔士法院ジウヒルヲ用フルノ制度、漸
 ク他各國ニ覃及セシカ、就中刑法事務ニ於テハ、
 此制ヲ用フルノ最モ盛ニレテ、遠ク私法事務ニ
 超テ、初メ亞米利加此制度ヲ取用シ、次テ佛國及
 ヒ羅馬人種ノ各國ニ及ヒ、近世ニ至リテハ獨乙

及瑞士等、亦皆之ヲ取用スルニ至レリ、然此法
 各國ニ蔓延スルニ隨テ、漸ク數種ノ弊害ヲ生レ
 タリ、蓋此制度各國ニ於テ、全ク民性ニ適シ實ニ
 司法ニ緊要ナル者トナルニ至ル迄ハ、恐ラクハ
 猶數歲月ヲ費スナル可シ、
 擔士法院ノ本性ハ、殊ニ下ノ二件ニ在リ、其第一
 件ハ、判定ヲ二分スルトス、即其一ヲ事問トタプ
 ラ、一ノ判定ト為ス、及ヒ法ニ由テ罪ノ有無ヲ判
 決スルノ務メモ、亦必ス此判定ニ屬シテ、離ル、
 ナレ、其二ヲ法問レトヒレグレノ判定ト為ス、即刑法

國法論 卷八 下 九 官 署

ニ據テ、罪科ニ適當スヘキ法ヲ決定スルヲ云フ
 ナリ、又其第二件ハ司法ノ官司ヲ全ク區分シ、法
 士ト擔士トヲ設ケ、而シテ事問ノ判定ハ、必、民間
 ヨリ舉ケタル私人ナリ、〔按〕擔士ハ必、シモ法學ニ練磨
 セル者ニアラス、ニ托シ、法問ノ判定ハ、必、能ク法
 學ニ練磨セル定任ノ官吏ナル法士ニ委任スル
 ナリ、但、事問ノ判定ヲ掌レル私人ハ、決シテ中古
 日耳曼ノ^{〔按〕}擔士ノ如ク、定任スルニアラス、
 必、時ニ臨テ舉任スルカ故ニ、時々交代スル者ナ
 リ、〔按〕擔士ハ、^{〔按〕}擔士ノ如ク、定任スルニアラス、
 必、時ニ臨テ舉任スルカ故ニ、時々交代スル者ナ
 リ、

擔士ヲ用ノル制度ノ利害ハ、左ニ論スル所ノ景
 況ニ由ル、凡ソ法士ト擔士ノ際、絶エテ嫌隙ヲ生
 スルコトナク、能ク一致シテ、共ニ司法事務ヲ掌リ、
 而シテ常ニ審理ヲ總管スル所ノ法士ハ、其事務ヲ
 掌ルノ卓越ナルニ由テ、能ク法學ニ練熟スル所
 以テ、表スニ足レハ、此制度甚タ利アリト云フ可
 シ、然ルニ若シ擔士法院ノ景況、全ク之ニ反スル
 キハ、其利害亦相反スル言ヲ俟タス、其他法士タ
 ル者、アドホカト、〔按〕對手ニ代リ者、若クハ兩對手
 〔按〕罪状ヲ告訴セラレタル者ト、〔按〕對手ニ代リ者、若クハ兩對手
 〔按〕罪状ヲ告訴セラレタル者ト、〔按〕對手ニ代リ者、若クハ兩對手

國法論 卷八下 法律

セラレテ、是等ノ徒ノ綴ニ司法事務ヲ以テ、自ラ相争ヒ相凌クノ具トナスヲモ、制スル能ハサル歟、若クハ法士十分ニ其務ノヲ盡サント欲シ、自ラ兩對手ノ争論ニ関スルヲ、實ニ過當ニ渉ル等ノ弊生スルキハ、誓士ヲ用フルノ制度甚々害アリ、○凡、誓士ヲ用ヒテ、審理ヲ施スヤ、嘗テ法ヲ學ハサル誓士ノ判定ヲ以テ、却テ法學者ノ判定ニ優レリトスルニアラス、唯諸罪科共ニ、民間ヨリ舉任セル識者ノ自然ノ識得（按）法学ノ練磨ヨリ生スル識得ニアラサラサルヲ以テ、認メテ有罪トナセル惡行ニアラサ

レハ、決シテ刑セサランヲ欲スルカ為メノ、○總テ法ヲ論示シ、併セテ正義公直ノ旨ヲ保護スルカ如キハ、即チ法士ノ職掌ナリ、法士タル者ハ、固ク道義ヲ守リ、以テ審理ノ務メヲ堅固ニセサル可ラス、而テ法士實ニ此事ヲ盡サント欲セハ、告訴者（按）アライシケレド、即チト、自護者ハ、デケル（按）罪犯ヲ告訴ノ際ニ、苟クモ偏頗ノ情ヲセラレタル者ヲ云、生スルヲナク、唯公平ノ心ヲ以テ審理ヲ施スニアラサレハ、決シテ能ハサルナリ、其他誓士ヲ設置スルノ法ニ就テ、其利害ヲ論ス

ルコトハ、最モ緊要ナルコトナリ、
 英國ニ於テハ、尋常ノ擔士法院
 ト、別種ノ擔士法院
 天全ク區別セントスルノ機、既ニ現然タリト雖
 凡、他國ニ於テハ、或ハ此區別ヲ以テ、却テ不可ト
 為スノ論アルヘシ、○凡、尋常ノ擔士法院ト称ス
 ル者ハ、其擔士ナル者判定ヲ為スニ、絶ヘテ別種
 ノ學習練磨ヲ要セサル法院ヲ云フ、尋常ノ審理
 ハ、大抵此法院ニ於テ掌ル所ナリ、然ルニ別種ノ
 擔士法院ト称スル者ハ、事問ヲ判定シ、及ヒ罪ノ

有無ヲ判決スル等ニ就テ、必ズ別種ノ學習練磨ヲ
 要スル時ノミ、其務ヲニ従事スル所ノ法院ヲ云
 フナリ、而テ尋常ノ擔士法院ニハ、唯尋常ノ才識
 アル人物ヲ舉任スルノミニシテ足レリ、決シテ
 別種ノ學習練磨アルヲ要セス、故ニ尋常平民ノ
 中等ニ於テ、其人物ヲ求ムルモ、決シテ得難キニ
 アラス、然ルニ別種ノ擔士法院ニ舉ント欲スル
 擔士ノ如キハ、必ズ別種ノ學習練磨ヲ要スルカ故
 ニ、其人物ヲ選フニハ、必ズ別種ノ業科ニ練磨セル
 徒中ニ就テ、為サ、ル可ラス、○例ハ、出版ノ事

件ニ就テ、審理ヲ施ス時ニ於ケルカ如キ、元來其
 事ニ諳熟スル者甚ク多カラスト雖、必ス務メテ
 練磨セル者ヲ選ヒ、以テ別種擔士ト為サ、ル可
 ラス、凡、盜賊殺傷等ノ告訴アル時ニ於テハ、縱令
 嘗テ別種ノ學習練磨ヲ經サル都人農民等ト雖
 凡、唯其事ノ景況、諸種ノ證左、及、被告人ノ舉動等
 ニ據テ、其罪科ノ虛實ヲ判定スルヲ決シテ難カ
 ラスト雖、凡、法院若シ文章上ノ辯論、或ハ語言上
 ノ條陳等ニ於テ、才力アル自護者〔被〕告人ノ縱談巧
 辭ヲ以テ、其罪迹ヲ掩蔽セントスルヲ洞察シ、或

ハ一個人ト云、即、公眾ニ對シテ一人ヲ指斥スル
ノ語ナリ、茲ニ一個人ト云、論說、縱令、公眾一般
ノハ、即チ被告人ヲ指ス、雖、亦辯論ノ自
 由權ヲ敬重シテ、自由ニ辯論セシムルカ如キハ、
 尋常平易ナル都人農民等カ微力ノ決シテ及フ
 所ニアラス、若シ此ノ如キ時ニ於テモ、仍尋常平
 易ナル都人農民等ヲ擧テ、擔士ト為ス片ハ、動モ
 スレハ自護者カ縱談巧辭ノ詭譎ニ陥リ、遂ニ其
 判定ヲ誤ルヤ必然ナリ、總テ此ノ如キ擔士ハ、素
 確乎タル學習ナキヲ以テ、其判定ニ於ケル、或ハ

甚嚴酷ニ過ギ、或ハ甚寛大ニ失シ、加之私意ヲ挿
 サムカ如キ弊害ヲキヲ得ス、
 擔士ヲ舉任スルニ、拈闖子ノ法ヲ用フルノ國最
 モ多シ、實ニ宜シキヲ得ル法ト云フ可シ、若シ他法
 ヲ用フルルハ、必ス二個ノ相對セル嚴礁ノ危害ヲ
 避クル能ハサルヘシ、他法二種アリト雖モ、俱ニ
 擔士制度ノ良正ヲ障害スル者ナリ、即チ其第一法
 ハ、政府專ラ誓士ノ舉任ヲ掌ルノ法ナリ、凡シ法士
 ノ如キハ素高貴ノ官ニシテ、且其人ハ必ス法學ニ
 練熟スル者ナルカ故ニ、政府之ヲ舉任スト雖モ、

決シテ政府ノ威光ニ眩惑セラレ、カ如キ患ナ
 シ、然ルニ誓士ノ如キハ、素官吏ニラス、亦盡ク
 能ク法學ニ通曉スル者ニアラサルヲ以テ、政府
 ノ舉任ヲ受クルルハ、多クハ唯政府ノ意旨ヲノミ
 奉承シ、動モスレハ其旨ヲ遂クルノ具トナルニ
 至ルノ弊害アリ、是即チ第一ノ嚴礁ナリ、又其第二
 法ハ、國民ノ選擇ヲ以テ誓士ヲ舉任スルノ法ナ
 リ、若シ此法ヲ用フルルハ、勢ヒ誓士唯政論黨派
 明開化國ニテハ、政治方法ノ議論ニ就テ、衆民中
 ニ數党分レ、各其是トシテ、可ト思フ所ヲ主張シ
 テ、相競ヒ、以テ遂ニ政令ノ方向ヲ變セシメ、意ヲ
 ムルノ勢カアリ、之ヲ政論黨ト云ス、

奉承シテ之ニ依靡スルニ至ル、故ニ誓士タル者
 殆政論黨派ノ奴僕ノ如クナリ、偏頗不公平ノ判
 定ヲ以テ、遂ニ司法事務ノ純清ヲ汚スノ弊害ア
 リ、是即第二ノ巖礁ナリ、是故ニ此二個ノ巖礁ヲ
 避ケント欲セハ、必、拈闖子ヲ以テ舉任スルノ法
 ヲ用ヒサル可ラス、○但、此法ヲ用フルキハ、被告
 者或ハ自ラ信セサル誓士ノ判定ヲ受クルノ患
 ヲ免レサルカ如シト雖、被告者若誓士ヲ信セ
 サルコトアラハ、直ニ之ヲ辞却シ得ルノ權利ヲ以
 テ、之ニ與フルノ法アレハ、此ノ如キ患ハ、全ク消

滅ニ歸スル、敢テ辨ヲ俟タス、
 但、拈闖子ヲ以テ舉任スルハ、其事素偶然ニ出ル
 者ナレハ、決シテ人物ノ其任ニ耐ルヲ保ツニ足
 ラサル者ナリ、故ニ必、能ク其任ニ耐ユヘキ者ノ
 ミヲ以テ、拈闖子ノ權利ヲ得セシムルコト、甚、緊要
 ナリ、誓士タル者、其力若、獨歩自立シテ、家計ヲ經
 營スル能ハサルハ、決シテ衆望ヲ得ル能ハス、且、
 通例成人ノ年齢ヲ過キテ、家事産業ニ由リ、世事
 ニ諳練スル者ニアラサレバ、決シテ其任ニ適ス
 ル能ハサルカ故ニ、以上諸件ニ於テ、實ニ間然ス

ヘカラサル者ノミヲ舉任スルノ法ハ、實ニ公正ニシテ、且、眞實ナル判定ヲ期スルニ甚、緊要ナリ、
 ○但、誓士法院モ、必、亦以テ正義公直ノ旨ヲ保護スヘキ者ナリ、故ニ之ヲシテ、決シテ政令ノ利害得失ニ着意セシメサルヲ、甚、緊要ナリ、

○〔按〕英國ニテハ、一千八百二十五年ノ憲法ヲ以テ、誓士舉任ノ法ヲ確定シテ、年齢二十
 一ニ至リ、且、土田ノ歲入十ポンド一ポンドハ、大約我
カ五圓ニ得ル者、若クハ所有物ノ貸賃一
アタル年二十ポントヲ得ル者ニアラサレハ、誓士

トナルノ權利ヲ有スル能ハサルコトセリ、
 然ルニ儘此理ニ反スル論ヲ立ツル者アリ、其論ニ據ルニ、誓士タル者ハ、法制ノ上ニ在テ、法制ヲ自在ニ取捨行止スルノ全權ヲ握ル者ナリト云フ、實ニ迷誤ノ甚、シキニ非スヤ、凡、法院ナル者ハ、唯現立ノ法制ヲ司守シテ、偏ニ正義公直ノ旨ヲ奉行スルノ外、他ノ職掌ヲ負フ者ニアラサス、誓士ハ、必、誓約ヲ以テ、此義務ヲ其心ニ銘スル者ナリ、然ルニ誓士若、自ラ其處分ノ法ニ合セサルアルヲ知ルコトアラハ、焉、ソ信實ノ法院アリト為ス可

ケンヤ、○又佛國ノ法院ニ於テ、一暴論ヲ採用シ
 テ、誓士ナル者ハ宜シク罪狀ノ證左ヲ取ル可シ
 ト云フノ規律ヲ遵守スルヲ要セス、唯其罪狀ノ
 未タ分明ナラサル所ヲ追究スレハ、足レリトナ
 ス、此事實際ニ於テ、殊ニ害アリ、但誓士ヲ設置セ
 レ以来、之ヲシテ自由ニ判定セシムルコトナリ
 シヨリ、古昔唯法學者ノミヲ以テ、合議法院テリヒ
 ギコルレヲ設立セシ世ニ於テ、偏ニ證左ヲ取ルノ
 法ノミヲ墨守セシ風習、遂ニ全ク消滅セシハ、實
 ニ誓士ヲ用フルノ利ト云フベク、且誓士始メテ

立チレ以来、罪犯人多クハ其罪ヲ掩フ能ハスレ
 テ、皆其刑ニ服スルコトナリシハ、各國共ニ實驗
 ニ由テ知ル所ナリ、然レモ誓士ヲ用フル制度ノ
 祖國ナル英及亞米利加兩國ニ於テ、未ダ曾テ證左
 ヲ取ルノ法(即罪アリト判定セシ所以ノ理ヲ、被
 告人ニ明白ニ知ラシムルノ法)ヲ以テ、全ク無用
 ニ属ストセシ論アルヲ聞カス、加之、此兩國ニ於
 テハ、證左ヲ探索スルノ術ヲ講求スルニ、心ヲ用
 エルヲ專旨トナシ、并ニ誓士ヲシテ、證左ニ注意
 セシムルヲ以テ、法士ノ務ト為ス、○法士ナル者

ハ、決シテ自ラ被告者ヲ無罪トシテ、赦免スルヲ
 得ス、及之ヲ有罪トシテ、刑罰スルヲモ得ス、必ヤ
 誓士タル者ノ尋常平易ノ識見ニ由リ、判シテ有
 罪ト定メシ者ニアラサレハ、之ヲ刑スル能ハサ
 ルハ、即誓士法院ノ通則ナリ、去レ氏法士タル者正
 義公直ノ旨ヲ奉シ、且、自ラ學習ノ浸漸ニ由リ、悟
 得セシ識見ヲ、誓士ニ告諭シ、以テ誓士ヲシテ之
 ヲ熟慮セシメ、及公正ニ判定セシムルハ、全ク其
 職掌ニシテ、之ヲ以テ不可トスルノ理ハ、決シテ
 アル可ラス、○歐洲大地各國ニ於テハ、法士ノ權

常ニ強大ニ過キ、遂ニ誓士ノ判定ヲ用ヒス、敢テ
 自ラ恣ニ判定ヲ為スカ如キ弊害アルヲ免レス、
 是ヲ以テ、往々此弊害ヲ驅除センコトヲ論スル者
 アリ、實ニ誓士法院ノ制度ニ於テ、有益ノ論ト云
 フ可シ、去レ氏又審理ニ於テ、法學ニ熟達シ、法士
 ノ威權ヲ務テ抑壓シ、而テ誓士ヲシテ、縱ニ判定
 スルヲ得セシムルヲ以テ、此法院ノ本意タラシ
 メント欲スルカ如キモ、亦司法ノ真理、及其尊嚴
 ナル所以ニ、全ク相戾ルト云フ可シ、
 既ニ論シタルカ如ク歐洲大地ノ各國ニ於テ、ス

國法論 卷八下 六

タリツアーンワルトノ官ヲ設立セシハ、全ク英
 國ノ制度ニ由ラサル者ナルカ、又誓士法院ノ制
 度モ亦大地各國ニ傳播セシ以來、二個ノ改正ヲ
 得タリ、即チ第一ハ、英國ニ用フルアーンカラ
 得タリ、即チ第一ハ、英國ニ用フルアーンカラ
 大英ノ大判官ハ、即チ大判官ノ誓士アリ、而
 テ大判官アリト思フハ、預メ罪犯ノ景況ヲ探
 實ニ罪アリト思フハ、預メ罪犯ノ景況ヲ探
 判定ナル者ナリ、但チ小判官ハ、之ヲ小判官ニ
 者ノミヲ舉テ、アーンカラゲセナトナル者
 ヲ設立シ、預メ告訴ノ次第ヲ查問スルノ務ヲ以
 テ、之ニ授托スルノ法ヲ立テ、第二ニハ、英國ニ於

テハ、私法ノ意、今仍チ大ニ司法上ニ存スト雖、大
 地各國ニ於テハ、罪犯人ヲ追捕刑罰スル事ハ、漸
 ク國家ノ掌ル所トナリテ、今世ハ、司法上、絶エテ
 私法ノ意ノ存スルアルヲ見サルニ至レリ、

第五款

政務法事務

ハルワルツグスレ
 ヒツブレツグスレ
 按政務

トニ係レル公權利ノ規律ヲ起ル
 ト云故ニ此公權利ニ就テ起ル
 諸事論ヲ裁断スルノ事務ヲ、政
 法事務ト云、法院司ル所ノ私法、刑
 法ノ二事務
 ト相異ナリ、

公權利ニ就テモ亦爭論ノ生スルコトアリ、而テ此

時ニ於テハ國家其權ヲ以テ之ヲ裁斷セサル可
 ラス、但、今世ノ公法院（テヘントリヒ、レヒトリヘ
 ヲ、ハ、公法權利ト訊ス、即チ政務法ヲ云、中ニ
 於テ、僅ニ其數部分ヲ司ルノ權アリ、故ニ其過半
 ハ、方今尚未タ之ヲ司ル所ノ法院、并ニ制度アラ
 ス、就中公法中ノ重要ナル部分ニ至リテハ、最モ
 然リトス、實ニ公法事件ニ係リテ起レル諸爭論
 入悉皆裁斷スヘキ法院ヲ設立スルハ、恐ラクハ
 後世始メテ能クスヘキノミ、（此處ハ、
 公法ノ事ニ係リテ起レル爭論ノ部類ハ、大略左

ニ舉ルカ如ク、

〔甲〕列國法ニ係レル爭論

列國ノ權利ニ係リテ、
 其際ニ起レル爭論ヲ裁斷スルニ堪ユヘキ法院
 ハ、今時尚未タ之ヲアラス、故ニ二國相争フキニ於
 テハ、儘調停裁判（レ、
 國相争フ兩國ノ依局外中立ノ
 中間ニ入テ裁ス、
 施ス、
 必ス兩國綴議レ相
 共ニ之ヲ請フニアラサレハ、此事決レテ行ハル
 可ラス、其他ブリセングリヒト（接
 戰爭ノ際、敵艦
 捕拏セルキ、其
 邪正曲直ヲ判定ノ如キハ、固ヨリ兩國ノ共議ス
 裁斷スルヲ云、
 然レト雖モ、必獨其本國（接
 艦ヲ敵

捕撃スル者ノ之ヲ裁斷スルナリ、
ノ本國ヲ云、

〔乙〕君位繼嗣ニ係レル争論ノ如キモ、國事法院亦之ヲ裁斷スルノ權ナレ、而テ列國復之ヲ裁判スル權ヲ有セス、國家ノ大事勢獨、能ク之ヲ裁斷スルナリ、凡、權勢事業、兩ツナカラ全ク、舉國若クハ官司等ノ許可服従ヲ得ル者、遂ニ能ク君位ニ登ルヲ得ルハ、即、勢ノ然ラレムル所ナリ、

〔按〕君位繼嗣ノトヨリ争鬭ヲ生スルトア
ルハ、權勢事業、兩、ナカラ全クレテ、遂ニ全
國ノ許可服従ヲ得ル者、自ラ勢ニ由テ、君位

ニ登ルヲ得、故ニ國家ノ大事勢獨、能ク之ヲ
裁斷スト云フナリ、

〔丙〕國憲可否ノトヨリ起レル争論ノ如キモ、亦必
法院ノ裁斷ヲ用フル能ハス、而テ或ハ政論黨派
ノ分争、能ク之ヲ裁斷スルヲ得、〔按〕權ヲ得タル黨
テ、國憲ヲ確定ス、故ニ分争之、或ハ兩院ト政府ノ
ヲ裁判スルヲ得ト云フナリ、或ハ兩院ト政府ノ
商議ヲ以テ、之ヲ裁斷シ、又ハ憲法及ヒ上諭ヲ以
テ、之ヲ裁斷スルヲ得ルナリ、獨、亞米利加合邦ニ
於テハ、通例合邦法院、フ、ン、デ、ス、ダ、リ、ヒ、ト〔按〕合邦
全國ノ法ヲ司レル法院、
能ク此ノ如キ争論ヲ裁斷スルノ權有リ、去レ此

國ニ於テモ、國家諸權柄ノ意互ヒニ相背反シテ、
 全ク一致和同セサル時ニ於テハ、法院縱令其裁
 斷ヲ施シテ、之ヲ行ハント欲スルモ、決シテ能ハ
 サルナリ、蓋一千八百六十一年^{萬延}ヨリ六十五
 年^{慶應}ニ至ル五年間、國內ノ大戦争、及其後ノ形
 勢ヲ通視スレハ、此理自ラ明亮ナル可シ、○去レ
 若此ノ如キ争論アルニ方リ、徒ニ形貌上ノ正真
 ナル法ニノミ遵テ裁斷スルキハ、其弊更ニ巨大
 ニ至ル可シ、蓋自然ノ勢ニ合シ、且、日々進歩スル
 世態ニ適スル所ノ裁斷ハ、獨、經綸ノ才識ヲ具ス

フル俊傑ニアラサレハ、決シテ為ス能ハサルナ
 リ、
 (丁)軍務ルミワリテ^ルツ^ンル^ハ、及ヒ(戊)警保務ル^ボリ^テイ^ハ
 グ、ノ区域内ニ於テハ、其官司許多ノ法問ヲ判定
 裁斷セサル可ラス、而テ此判定裁斷ヲ以テ、更ニ
 法院ニ告訴スルヲ許サス、殊ニ此種ノ法問ハ、其
 便宜ニ從テ、武官及ヒ警保官ノ事務ニ屬ス、蓋此
 法問ハ、専ラ事ノ便益ト否トニ、緊切スルヲ以テ
 ナリ、^(按)唯正義公道ノ^ミ例^ハハ戦争ノ時ニ於テ、
 軍隊俄ニ民人ノ交際ヲ阻攔シ、及其連合ヲ隔斷

之、或ハ大砲ヲ民家ニ發射シ、又ハ禾田ヲ蹂行ス
 ル等諸件ノ實ニ緊要ナリヤ否ハ、皆專ラ軍事ニ
 係レルヲナリ、去レ是等諸件モ亦、必、法ヲ以テ論
 セサル可ラサルハ、固ヨリ當然ナリ、○又火災起
 ルニ方リ、家屋ヲ毀壞シ、或ハ傳染病アルニ方リ
 テ、患者ノ他人ト接遇スルヲ禁レ及、病獸ヲ屠殺
 スル等、必行スヘキヤ否ヤハ、警保官タル者、專ラ
 公衆ノ安寧ニ注意シテ、裁定スル所ナリ、去レ是
 等ノヲ、其便益ト否トノミヲ以テ、論ス可キニア
 ラス、亦必、法ヲ以テ論セサル可ラサルハ、固ヨリ

當然ナリ、○斯法ノ區域ニ属スル裁定ヲ以テ法
 院ニ托セス、却テ武官或ハ警保官ニ托スルハ、殊
 ニ怪シム可キカ如シト雖モ、是等諸件ハ、必、十分
 嚴猛ノ權力ヲ以テ、處分セサル可ラス、故ニ之ヲ
 單ニ武官若クハ警保官ニ托シテ、決シテ法院ヲ
 シテ、之ニ關セシメサルナリ、若、法院ヲシテ是等
 諸件ニ關セシムルノ法ヲ立ルキハ、兵權警保權
 共ニ、遂ニ痿痺衰弊スルノ恐ナキ能ハス、
 但、右等ノ處分ニ由テ、武官及警保官等、若、私人ニ
 損害ヲ為セシカ為メニ、私人或ハ其償金ヲ乞フ

「ア」レハ、其請願ノ當否曲直如何ヲ判定スルハ、固ヨリ私法院ノ職掌ナル可ク、又右等處分ヲ為スノ時ニ於テ、警保官ノ施シタル警保刑ポリツヲハ、（按）警保官ノ施シタル警保刑ポリツニ必要ナルキ、之ヲ判定スルハ、固ヨリ刑法院ノ職掌タルヲ辨テ俟タス、

「巴」元來諸官司ノ設立スル所ニシテ、且其管轄ニ屬スル公法モ、亦殊ニ許多アリ、故ニ此公法ヨリ起レル爭論ハ、必ス其諸官司ニ於テ、之ヲ裁斷スルノ權アリ、例ヘハ、選擇權利ワヒトニ係レル爭

論ノ如キハ、或ハ此權利ノ規律ヲ設立セル上官之ヲ裁斷シ、或ハ選擇セラル、徒、兩院ノ如キ是レナリ、之ヲ裁斷ス、其他總テ下等諸官吏ノ職掌ニ就テ、爭訟起ルキハ、乃其上官之ヲ判決ス、佛國ニ於テハ、狹義ノ政務法ヘルツ、（按）即「巴」ノ條ニヨリ、復タ區分シテ、別種ノ者トナシ、而シテ此法ニ係レル事務ヲ舉ケテ、全ク別個ノ法院ニ委託セリ、近世各國復之ニ倣フ者多シ、○狹義政務法ノ區域ハ、殊ニ宛カモ會社若クハ

職官ヲ奉承スルノ義務（按公務諸職官中ニ就テ、各人必奉承セサル可ラ
サル者アリ、卷之七 軍事ニ役事スルノ義務及、公
 衆利益ノ為メニ、私有ヲ放與スル等是ナリ、
 狹義政務法ノ區域ハ從來甚狹少ナリト雖、固
 コリ廣濶ニナシ得可ク、加之之ヲ廣濶ニスル、
 甚緊要ナリ、○但從來政務官獨、狹義ノ政務法ヲ
 司ルノ全權ヲ有シテ、決シテ法院ノ監察ヲ受ク
 ルコトアラザリシカ、此全權近今次第ニ減絶スル
 ノ時至レリ、
 政務法事務ノ良善ナルヲ庶希セハ、必之ヲ別種

ノ法院ニ委託シ、且別種特別ノ審理規律ヲ設ク、
 之ニ由テ、審理セシムルヲ最要トス、佛國ノ政務
 法ハ、頗ル完備シ、且其規則明亮確實ナルヲ、大ニ
 他各國ニ超越ス、蓋政務法ヲ司レル法院ノ編制、
 殊ニ宜シキヲ得ルカ為ノナリ、
 方今獨乙各國ノ如キハ、政務官直ニ此法ヲ司ル
 カ故ニ、公權ヲ有スル會社、及私人ヲ保護スル、
 全ク十分ナラス、且動モスレハ、政務官私意ヲ以
 テ、處分スル等ノ弊害アリ、○然ルニ、若元來私法
 ノミヲ司レル訴訟法士ヲシテ、兼テ政務法ヲ司

ラシムレハ、必ス二個ノ弊害ヲ生スヘシ、何者、此法士ハ、政務法ニ係レル事ノ實ニ公事ナル所以ニ注思セシテ、動モスレハ、徒ニ私法ノ規律ヲ遵守シ、誤リテ公事ヲ害シ、或ハ此法士、政務法事務ニ於テ、必要ナル自由ノ思慮考按ヲ取テ、遂ニ之ヲ其本務ナル訴訟事務上ニ移シ、以テ訴訟事務ヲ害スルノ患アレハナリ、○

○〔按〕訴訟審理ノ如キハ、偏ニ法ヲノミ、遵守スヘキコト當然ナレバ、政務法ニ係レル審理ニ至リテハ、素法ヲノミ、遵守スヘキニアラ

ス、必ス其事ノ便益ナルト否トヲモ、併セテ注思セサル可ラス、故ニ此審理ヲ掌レル法士ニハ、必ス自由ニ思慮考按スルヲ許ス、甚緊要ナリ、然ルニ訴訟法士ヲレテ、政務法ニ係レル審理ヲモ兼掌セシムルハ、自ラ之ニ習慣レテ、知ラス覺ヘス、訴訟審理上ニモ、亦自由ノ思慮考按ヲ施スノ恐ナキ能ハサルナリ、

政務法院ハ、スグレツト、ノ編制ニ就テモ、其法ニ通曉セル官吏ト、及民間ノ私人トヲ合スルハ、

於テハ、此分畫ヲ立ルノ緊要ナル所以ヲ、十分
 = 悟得セサリシカ故ニ、太古ニ於テハ、政令ト司
 法ヲ合併シテ、全ク一個ノ者トナシ、又中古ニ於
 テハ、政府ヲ以テ、適ニ法院ト同一ナル者ノ如ク
 ナセリ、○但、今時ニ於テモ、此ノ如キ分畫ヲ為ス
 1、決シテ容易ナリト謂フ可ラス、蓋、政府ト法院
 ノ區域ヲ綿密ニ分畫セント欲スルニ方リテ、政
 府ニ屬シテ可ナルヤ、將法院ニ屬シテ可ナルハ
 キヤ、儘決シ難キ部分アリ、是故ニ其區域ノ分線
 ヲ畫スル、人々皆異ニシテ、甲ハ此處ニ於テシ、乙

ハ彼處ニ於テシ、丙ハ又他處ニ於テシ、其他人々
 學術業務ノ相異ナルニ隨テ、分畫ノ論更ニ大ニ
 異ナリ、是ヲ以テ法院ノ徒ト、政府ノ徒ト、其論全
 ク一致スルハ、甚タ容易ナラス、○法院ノ徒ノ所見
 ハ特ニ一個人（按、即、各ノ權利、即、私權利ニ屬ス、ヲ指シ云フナリ、）ノ權利
 侵犯スル處分、若クハ論說アルヲ知ル片ハ、則チ直
 ニ私權利ヲ損害スルト視做シ、必ス常ニ之ヲ保護
 セサル可ラスト為ス、然ルニ政府ノ徒ハ、之ニ及
 シテ特ニ國家ト、及ヒ國家ノ權利トニ著意シ、實

ニ公衆ノ安寧ヲ增益スルノ事ニ至テハ、一モ遺策ナク悉ク之ヲ遂ケント欲ス、故ニ一個人アリテ、苟クモ其權利ヲ主張シ、政府ノ命令ニ抗スルハ、及、法院亦此一個人ノ權利ヲ保護セント欲スルハ、乃、直ニ斥シ、以テ國家ノ威嚴ヲ侮瀆シ、其權力ヲ阻攔スルノ所行ト視做シ、常ニ嚴ニ之ヲ禁セント欲ス、○又法院ノ徒ノ通見ハ、凡、法ニ係レル諸争訟ハ、全ク法院ノ裁斷ニ属スヘキ者ニシテ、而テ政務官ノ裁斷ニ属スヘキ争訟ハ、罕ニ之アリト為ス、是ヲ以テ此徒動モスレテ、一個人

ノ縦ニ政權ニ抗争シテ、其施行ヲ阻攔シ、及、此權ノ區域ヲ減縮セント欲スルノ非理ニ属スル所以ヲ忘失シ、及、政府ノ區域モ、亦法院ノ區域ノ如ク、常ニ確定スル者ニシテ、此區域ハ議論生シテ、而後ニ始テ生スル者ニアラサル所以ヲモ忘失ス、然ルニ政府ノ徒ハ、之ニ反シテ、常ニ謂ラク、苟モ國家ニ關セルトハ、政務官獨、專ラ之ヲ裁斷スヘキト、固ヨリ當然ニシテ、唯罕ニ之ヲ法院ニ托スルヲアルノミト、○以上諸論皆非ナリ、凡、法院及、政府ノ裁斷共ニ、必、常ニ確定スル所ノ區域ア

リテ、各之ヲ確守スヘキ者ナルカ故ニ、互ニ他ノ職掌ヲ以テ、唯罕ニ之アリトナスカ如キハ、甚タ不可ナリ、元來政府ト法院ト、相岐分スル所以ノ理勢ニ注意シ、及其本性ノ全ク相異ナル所以ノ理趣ニ著眼シテ熟思スルハ、其區域相分カル所以ノ理モ、亦當ニ明亮ナル可シ、佛國ニ於テハ、一千七百八十九年元寬政顛覆起ルニ方リテ、法院ノ掌ルヘキ裁斷ト、政務官ノ掌ルヘキ裁斷トヲ以テ、全ク相分割シタリ、此國ハ從來司法議院パダリヒトトハス、ナル者、政務官ノ掌ルヘキ裁斷

ニ參預スルノ制アリシカ、此顛覆ノ際ニ至リ、國家從來ノ制度ヲ全ク破壊シ、更ニ之ヲ一新スルヲ以テ至急ノ務トナシ、加之、公衆ノ安寧ヲ謀ルヲ以テ至高ノ法トスルノ論、更ニ其間ニ生スルニ隨ヒ、此制ヲ以テ、愈有害ノ者トナスニ至レリ、是ニ於テ顛覆黨ノ暴威ヲ以テ、法院ノ過強權ヲ挫折スルノ勢力非常ニ増加シ、遂ニ一千七百九十年元寬政ニ於テ、左ノ憲法ヲ示令セリ、曰ク「政務ノ處分、縱令如何ナルモ、法士敢テ之ヲ障礙スルヲ許サス、且、政務官吏ノ奉務、縱令如何ナルモ、決

シテ之ヲ法院ニ名スヲ許サスト、○是ニ於テ許
 多ノ獄訟ヲ舉テ、政務官ノ裁斷ニ歸シ、及ヒ實ニ
 法院ノ管轄ニ屬スベキヲモ、之ヲ法院ヨリ奪
 ヒ、以テ政務官ノ裁斷ニ托スルニ至レリ、且、那破
 倫世ナリ第一亦法院ヲ以テ、政令ノ大障碍タル者ト
 シ、愈、法院ノ權カヲ減損シ、以テ政務官ノ權カヲ
 増大セシカ故ニ、政務官ノ掌ル裁斷ノ區域、遂ニ
 頗ル寛宏トナレリ、○然ルニ獨乙ニ於テハ其法
 學ノ旨、殊ニ私權利ヲ敬重スルヲ主ト為スカ故
 ニ、憲法ノ制立、及、實地ノ處分共ニ、其為ス所、全ク

佛國ト相及セリ、而テ人民ノ權利、及其自由ノ權
 ハ、法院ノ管轄ニ屬セシムルハ、大ニ堅確ヲ得
 ルカ故ニ、愈、法院ノ權カヲ盛大ニ為スニ至レリ、
 蓋、良好ノ處置ト云フ可シ、去、此、事又甚々シキ
 ニ過キ、實ニ國家ノ權ヲ以テ、裁斷セサル可ラサ
 ル事件ヲモ、併セテ法院ノ管轄ニ歸シケレハ、遂
 ニ大ニ政府ノ權ヲ減削スルニ至レリ、是、即、法院
 ノ權ノ微弱トナルヲ矯メント欲シテ、遂ニ又政
 府ノ權ヲ屈撓セシメシナリ、
 凡、政府ハ公衆ノ安寧ヲ保持シ、及、之ヲ增長スル

ヲ以テ、其主務トナシ、法院ハ國內一個人〔私人〕ノ
 上ニ在テ、國家ノ正義公直ノ旨ヲ施行スルヲ以
 テ、其主務ト為ス者ナリ、是故ニ政府ノ議判指令
 ハ、其旨常ニ國家公眾ノ為メニスルヲ歸ト為シ、
 法院ハ殊ニ私人ノ私權利ニ屬スル者〔私法〕ヲ保
 護シ、及ヒ不正ノ所行ヲ為セル一個人アルニ方
 リテハ、必ズ之ヲ刑シ、以テ國家ノ正義公直ノ旨ヲ
 著ス〔刑法〕ヲ以テ本旨ト為ス、故ニ法院ノ職掌ハ、
 必ズ私人ニ對向スル者ナリ、今更ニ他ノ語言ヲ以
 テ、政府ノ職掌ト、法院ノ職掌ト相異ナル要旨ヲ

述ベ、凡、國家ノ法ニ係レルコトハ、政府宜シク之
 ヲ掌ル可ク、又私人ノ法ニ係レルコトハ、法院宜シ
 ク之ヲ掌ル可シ、○國家ノ法ニ係レルコトハ、必ズ公
 衆ノ安寧ニ著意スルノ緊要ナル所以ヲ失フ可
 ラス、從來ノ法ハ、通例唯政令ノ規律限制ナルノ
 故ニ、故ニ決シテ其政令ノ精神ト称スルニ足ラス、
 〔按〕法ハ唯規律限制ナルノ故ニ、故ニ唯法ニ由ルモ、
 決シテ公眾ノ安寧ヲ謀ルニ足ラスト云フノ意
 故、又私人ノ權利ハ、偏ニ正義公直ノ旨ニ由テ、判
 定スルヲ貴ス、若シ此權利ノ判定ニ就テ、兼テ亦公
 衆ノ安寧ニ著意スルハ、却テ害アリ、〔按〕公眾ノ
 安寧ニ著

意スルハ、縦令決シテ正義公直ヲ傷ハサル所
 行モ、或ハ有罪ト為サ、ル可ラサルアリ、故ニ
 害アリト、是即、真誠ナル國法〔按〕博ク國法ト云フ
 其中ニ在リト雖モ、真誠ノ國法ヲ除クナリ、性ト
 ハ、真誠ナル政務法、及ヒ刑法ヲ除クナリ、性ト
 私法、刑法ノ性ト、全ク相異ナル所以ナリ、○唯真
 誠ナル政務法〔第五款〕ヲ參看ス可シ、〔按〕第五款〔已〕
 狭義ノ政務法ト、如キハ、私刑兩法ノ中間ニ位
 云フ者ニ同シ、レテ、此兩區域ニ關涉スル者ナリ、何者、公法〔按〕政務
 法ト、及ヒ公衆ノ安寧トニ、兼テ著眼スル一ハ、一
 個人ノ身上ニ在テモ、決シテ矛盾スル所ナク、并
 ニ公衆ノ為メニモ、亦決シテ害ナキカ故ニ、政務

法ノ判定ニ就テハ、先、規律、憲法〔按〕私法及ヒ刑ニ
 著意シ、而テ後公衆ノ安寧ニ著意スルヲ以テ、甚
 緊要トナセハ、ナリ、〔按〕是即、政務法ノ中間ニ位スル所以
 前條論スル所ノ原則ヨリ、左ニ舉クル數件ノ規
 律ヲ生ス、
 〔第一〕國家ノ高尊ナル權利〔ホ〕レハト、ハ、決シテ法
 院ノ管内ニ屬スル者ニアラス、故ニ高尊權利ニ
 係レル爭論ノ如キ、凡、其當然ノ區域内ニ屬スル
 者ハ、必、政務官之ヲ裁斷スルノ權アリ、例ハ、警

保權、兵權及其他諸權柄ノ如キ、其當然ノ區域内ニ於テハ、決シテ法院ニ属スルヲナシ、故ニ法院ハ止一個人ニ對シテハ、能ク其權ヲ施行スト雖モ、以上諸權柄ニ對シ、決シテ其大權ヲ施行スル能ハサルナリ、○是故ニ政府ハ其政權ヲ施行スルニ於テ、決シテ法院ノ權威ノ為メニ、阻攔セラズ、者ニアラス、政府ヲ指令スル事ノ正ト不正ト、及、要ト不要ト、或ハ其處分ノ公ト不公ト、及、當ト不當トニ至テハ、政府自ラ之ヲ裁定スルヲ當然ナル可ク、法院モ亦其職掌區域内ノ事ニ於テ

ハ、自ラ之ヲ裁定スルヲ、全ク政府ニ異ナラサル可シ、○國家ノ諸權柄ニ係レル争論アルニ方リテ、一個人若シ此制度〔按〕政府決レテ法院ノ管下ニ屬セズ、法院亦政府ノ管下ニ屬スル所ナラズ、拒ムカ為メニ、法院遂ニ警保權、及、兵權ノ處分ヲ阻攔スルニ至ルヲアルハ、政府ハ唯其當然ノ區域内ニ於テスラ、尚法院ノ管下ニ在ルカ如クナリテ、其權力之カ為、ニ減削セラレ、殆ト其要務ヲ施ス能ハサルニ至ルハ必然ナリ、
〔甲〕然ルニ此常法外ノ事、復緊切トナルヲアリ、例

ハ其爭論ハ法院ノ裁斷スヘキ所ナルヤ、若クハ何レノ法院ノ裁斷ニ任スヘキヤ、之ヲ判決スルハ、全ク國法ニ係レル處分トス可キ、決レテ私法ニ係レル處分ト為ス可ラス、何者此ノ如キ定決ハ、全ク國憲ニ由ルヲ以テナリ、○但、法院若獨立ノ權アラサレハ、國家ノ正義公直ノ旨ヲ司ル、甚能、レ難キヲ以テ、獨政府ノ手ヲ假ラス、自己ノ職掌區域ヲ確定シ、而テ此區域内ニ於テハ、十分ニ自己ノ權カヲ用フル、甚緊要ナリ、是故ニ此ニ權柄〔無〕政府ト法各自己ノ意ニ隨テ、其區域ヲ

畫定スルノ權カヲ有ス、是故ニ時アリテハ、政府ト法院ト、其職掌區域ニ就テ、互ヒニ爭フコトアリ、令一事起ルニ方リ、政府ハ以為ヘラク、此事ニ就テ緊要ナル指令ヲ施シ、且、此ヨリ起レル爭論ヲ裁斷スルハ、全ク自己ノ本務ナリト、然ルニ法院ハ、又以為ヘラク、此爭論ハ己審理ノ規律ヲ以テ、判定ス可キ、當然ナリト、政府法院斯互ニ其職掌ニ就テ相爭フコトアリ、之ヲ職掌ニ係レル陽争〔ボ〕ニツコトフコト、ト云フ、或ハ又一事裁斷スヘキコト起ルニ方リ、政府

法院各其裁斷ヲ以テ、當ニ自己ノ掌ルヘキ者ニ
 アラストトシ、互ニ相推諉スルコトアリ、之ヲ職掌ニ
 係レル陰争子ガコトナリ、コトムベト云ス、
 然ルニ政府法院ハ、併ニ獨立自行スル者ナルカ
 故ニ、互ニ此ノ如キ争論ヲ裁判スルノ權ナレ、是
 故ニ國憲ニ隨テ、此争論ヲ裁判セシト欲セハ、必
 別種ノ一大權アリテ、之ニ臨マサル可ラス、而テ
 此一大權ハ、必、此二權ノ上ニ位レテ、絶エテ拘制
 セラレサル者ニアラザレハ、決レテ能ハス、今若
 此一大權ヲ以テ、立法府ニ托スレハ、甚益アルカ

如レト雖、元來此類ノ裁判ハ、後來ノ定則トナ
 ルヘキ者ヲ、設定スルニアラサルカ故ニ、當然立
 法府ノ掌ルヘキニアラス、何者、通例立法府ハ、時
 ニ臨ミ事ニ應シテ、實際ニ切要ナルコトヲ處分ス
 ヘキ者ニアラス、且、此ノ如キ争論ニ至テハ、多ク
 ハ事態錯綜セル者ナレハ、能ク其情實ヲ探索シ
 テ、判定ヲ施スカ如キハ、決シテ立法府大會ノ為
 シ得可キ所ニアラザレハナリ、○國家元首ハ、諸
 國權相聚合會同スル所ノ尖頭ナルヲ以テ、此ノ
 如キ裁斷ヲ掌ルヘキコト、固ヨリ當然ナリト云フ

可シ、去、氏若、ニニステルヲシテ、之ニ參預セシムル、ル、ハ、即、政府ノ長官ナルヲ以テ、
 現ニ相争競スル兩權ノ一ナル政府ヲシテ、其争論ヲ裁斷セシムルノ理ナリ、而テ政府ノ權、此ノ如ク偏重トナルルハ、法院有スル所ノ獨立自行ノ權、并ニ決シテ拘制セラレサル者、宜ク裁斷ス可シト云フノ規律、共ニ全ク有名無實ニ歸スルニ至ル、○是故ニニニステルヲシテ、國家元首ノ裁斷ニ參預セシムル規律ヲ用ヒス、或ハ議政官
此官ハ能ク事ニ老練スル者ニシテ、且、日常ノ政

令ニ關係セサル者ナルカ故ニ、裁斷上ニ於テ、能ク公正至當ノ處分ヲ為スニ足ル必然ナリ、ヲシテ、元首ノ裁斷ヲ匡輔セシメ、或ハ政官ト法士ト
ヲ合シテ、一局ヲ設ケ、以テ元首ノ裁斷ヲ匡輔セシムル、ハ、政府ノ權偏重トナリテ、遂ニ法院ノ獨立自行ヲ妨害スル等ノ患アル可ラス、
乙 ヒ ス ク ス、按、國家ノ事ヨリ争訟起ルニ方リテ、
 法院之ヲ裁斷スルノ法モ、亦常法外ニ属スルカ如シ、按、前、第一、 ニ 國 家 ノ 高 尊 ナル 權 利 ハ、 決 シ テ 云 フ ノ 意 ト 去 、 氏 國 家 ノ 所 有 ハ、 素 私 法 ニ 属 セ ル 者

ニシテ、絶^エテ公法ニ係レル者ニアラサレハ、此法
 決^レテ實ニ常法外ニ属スト云フ可ラス、凡^レ國家
 タリ^レ、其所有ニ就テ見ル^ル、全ク一個ノ私人
 ト相異ナラス、國家果シテ一個ノ私人タル^ル、
 真ノ私人ト同シク、法院ノ管下ニ属シテ、其裁斷
 フ受クヘキ^ク、固ヨリ當然ニシテ、決^レテ法院ト
 相並立スルノ權ナシ、
 但^レ、國家所有ニ係レル權利ハ、概シテヒスクスノ
 法〔私法〕ヲ以テ論スヘシト云フニハアラス、國家
 其臣民ヨリ取ル^ル、所ノ租稅ノ如キニ至テハ、實ニ

私人ノ所有ヨリ出ル者ニシテ、全ク錢財ニ係ル
 カ故ニ、此公權利〔按即租稅ノ權利〕ノ如キハ、通常ノ諸
 公權利ト異ナル所アルハ、固ヨリ辨^テ俟^テタス、去
 凡^レ國家其臣民ヨリ租稅ヲ取ルノ權利ハ、債主ノ
 負債者ニ對セル私權利トハ、全ク異ニシテ國家
 實ニ臣民ノ上ニ在テ、施行スル所ノ權柄ナリ、是
 故ニ租稅收取ノ^ルニ就テハ、國家ハ全ク上ニ在
 リテ、十分ニ臣民ヲ馭スルノ權利ヲ握ル、決^レシテ
 臣民ト並立シ、其對手トナリテ、法院ノ裁判ヲ受
 クルノ理アル可ラス、○是故ニ或ハ租稅收取ノ

規律公正至當ナリヤ否或ハ臣民中某品位宜シ
 ク納税ノ義務ヲ負フヘキヤ否或ハ私人所有ノ
 中ニ就テ、此種類ニ租税ヲ命スヘキヤ、將彼種類
 ニ租税ヲ命スヘキヤ等ノ事、若決定シカタクキ
 ニ臨ミ、之ヲ裁判スルハ、決シテ私法ノ事務ニア
 ラス、全ク公法ノ事務ナリ、故ニ政務官宜ク之ヲ
 裁判スヘキ、固ヨリ當然ト云フ可シ、政務法官之
ヲ裁判スレハ、更ニ良シトス。○政府或ハ取税ノ
 權利ヲ恣行シテ、虐政ヲ施シ、遂ニ臣民ヲ困シム
 ルノ恐レアルヲ以テ、租税ノ規律ヲ設定スルノ

初、預メ^{〔預〕}トシテ、^{〔預〕}若クハ民間ニ於テ、其事ニ練
 熟セル者ヲ選テ、共ニ之ヲ商議セシムレハ、則チ大
 ニ善トス、
 但、又租税ニ係レル争訟ト雖、或ハ又私法事務
 ニ属シテ、其官ノ判定ニ從フヘキ者アリ、即チ其争
 訟租税ノ理、及其收取ノ規律ニ關係ナク、〔即チ其争
訟、國家取税ノ權柄上ニ關セス〕唯一私人ノ所有
 物上ニ就キ、實ニ租税ヲ命スルニ足ルヤ否ヲ判
 決スルノ緊要ナルキニ於テハ、訴訟法士之ヲ掌
 ルノ當然ナリ、例ハ一私人或ハ自ラ論シテ、吾

カ所有品ハ、一ツモ租税ヲ納ムヘキ品種ニアラス
 ト云ヒ、或ハ吾ハ貧ウシテ、未タ租税ヲ納ムルニ
 足ルヘキ所有アラスト云ヒ、以テ納税ノ義務ヲ
 免レント欲スル片ノ如キハ、其論私法ノ事ニ係
 ルヲ以テ、必、法院ヲシテ之ヲ判決セシメサル可
 ラサルナリ、○但、或ハ私人縦ニ自論ヲ主張シ、以
 テ大ニ國家取税ノ權ヲ侮瀆スルニ至ルノ恐ナ
 キ能ハサルヲ以テ、必、別ニ此事ヲ判決スルニ適
 當セル審理規律ヲ設立シ、以テ國家ノ取税權ヲ
 保護スルハ、實ニ緊要ナリト雖、此等ノトヨリ

起レル争訟ヲ判決スルハ、決シテ國法ニ属セサ
 ルヲ以テ、全ク法院ノ掌ルヘキト、固ヨリ當然ナ
 リ、
 (丙)又警保官其處分ヲ私法上ニ施シ、以テ私權利
 ノ自由ヲ限制スルトアリ、但、警保官ノ處分ヲ為
 スニ於テ、能ク憲法ニ遵フヤ否、或ハ其規律ヲ守
 ルヤ否、又ハ其處分ノ事理實ニ緊要ニシテ、且、公
 正ナリヤ否等ノトハ、全ク國家ノ公權利ニ係レ
 ル事ニシテ、私法ニ属セサルカ故ニ、是等ノトヨ
 リ起レル争論ヲ判決スルハ、決シテ法院ノ掌ル

所ニアラズト雖モ、若警保官ノ處分スヘキ私事ニ就テ、
 起ルルアルモ、即例ヘハ警保官一
 個人ニ對シ、汝ハ家主ナリ、汝宜シク汝カ屋舎内
 ニ於テ、火災ヲ生シ易キ物ハ、悉ク除去スヘシト
 云ヒ、或ハ水ノ流通ヲ便ニスルルニ注意スヘシト
 ト警ムルニ方リ、一個人敢テ警保官ノ指令ヲ承
 諾ヒサルニハアラサレモ、其身元、家主ナラサル
 ノ故ヲ以テ、此指令ヲ遵奉セサルカ如キハ、全ク
 私法ニ屬セル爭論ト云フ可シ、故ニ此判決ハ必
 法院ノ掌ルヘキ事件タル、固ヨリ當然ナリ、

〔丁〕私有ヲ收取シテ、國家ノ有トナスル、
 之チオヨリ起レル爭論モ、私法上ニ關スル所アリ、
 但、此爭論ニ就テモ、國家ノ權ヲ以テ為スヘキ
 ヲリ起レルモノハ、總テ政府ノ處決ニ屬スト雖
 モ、唯此收取ノ為、ニスル償金ノヲヨリ起レル爭
 論ハ、必、法院ノ判決ニ屬スルナリ、
 可
 〔第二〕國家ノ高尊權利ヲ私人ニ授與シテ、私人ノ
 權利トナセシヨリ、此權利乃、純粹ノ公權利タル
 所以ヲ失ヒ、而テ私權利ノ一トナレリ、是故ニ此

權利ヲ授與セラレタル私人ト、他ノ一私人トノ
 際ニ、權利ノ爭論生スルキハ、法院必之ヲ裁判ス
 ル。○即チレガリテト按政府造幣、驛
 諸種ノノヲ掌ルノ特權ナリ、ヨリ出テ、政府ニ
 卷之十第三款ヲ参看スヘシ、其私權利トシテ、授托セラレタル諸種ノ權利、殊
 ニ此區域ニ屬ス、其他國家時アリ、一個人ニ特權
 ヲ授與シテ、一種ノ公義務ヲ赦免スルコトアリ、即
 イム、ニテト按兵事ニ役仕シ、或ハ職官ヲ奉
 務スル等ノ義務ヲ免カ、自
 由ヲ及、納稅ノ自由、納稅ノ義務ヲ免、亦此區域
 云、ニ屬ス、

中古レハ、按封建ノアリシ世ニ
 制ヲ云、於テハ、總テ公權利ト私權利ヲ混淆セシカ故ニ、
 國家ノ高尊權利ヲ以テ、屢私人ニ授與スルコト之
 アリキ、然ルニ輓近ハ、大ニ此二權利ヲ分チ、真誠
 ノ私權利ヲ以テ、全ク私人ノ權利ト為スヲ貴ヒ、
 而テ總テ國家ノ高尊權利ニ係レルコトハ、終始國
 家ノ掌中ニ在リテ、私人ノ手ニ移傳セサルヲ貴
 フニ至レリ、是故ニ今時ハ此ノ如キ規律按國家
 與スル人ニ授
 与スルヲ云、ヲ用フルノ區域、大ニ減縮セリ、
 第三真誠國法ノ區域ハ、決シテ私法院ノ管轄ニ

属セサルカ如ク、私法ノ闔域ハ、又決シテ政府ノ
 管轄ニ属セス、全ク私法院ノ管轄ニ属スルナリ、
 凡、私法ノ區域ニ属セルトニ就テ、争論起ルニ方
 リテハ、全ク正義公直ノ旨ニ由テ、之ヲ裁判ス可
 シ、決シテ、國家ノ意旨ヲ以テ、之ヲ裁判スルヲ許
 ス可ラス、何者、私法ノ事ハ、絶テ國家ニ属セス、唯
 私人ニ属スル者ニシテ、國家ハ唯私人ヲシテ、其
 權利ヲ保有セシムルノ務メヲ負フノミナレハ
 ナリ、素實ニ私法ニ属スヘキト、明亮ナル者ト雖モ、時

アリ疑惑ノ生スルコトアリ、宜シク考思セサル可
 ラス、即、茲ニ一個人アリ、他人若クハ國家ヨリ償
 金ヲ取ルノ權利有テ、之ヲ要求スルカ如キハ、全
 ク私法ニ属スヘキト、其理其事ニ於テ、全ク瞭然
 タリ、敢テ辨ヲ費スヲ要セス、是故ニ之ヲ判定シ
 テ、其曲直ヲ決スルハ、必、私法院ノ掌ルヘキト當
 然ナリ、○私人償金ヲ要求スルノ曲直ハ、判定ヲ
 施スニ於テ、最モ著意セサル可ラサル所ナリ、去
 氏法院此判定ヲ掌ルコト、當然ナルヤ、將政府之ヲ
 掌リテ當然ナルヤト云ヘルトニ就テ、議論ノ生

スルヲナキニアラス、例ヘハ、政府私人ノ租稅ヲ
 徵スニ、或ハ憲法ノ規律ニ由ラス、又警保官或ハ
 恣ニ私人ノ工業ヲ障碍シ之ヲレテ損失ヲ蒙ラ
 シムルヲアルヲ以テ、私人政府ニ要シテ其ヒス
 クス〔按政府ノ所有ナリ、ヨリ償金ヲ取ラント欲スルハ、若クハ一個人其身官吏ニ列スルヲ以テ、他ノ一個人ニ對シテ、不正ノ所行ヲナシ、以テ之ニ損害ヲ與フルカ故ニ、乙ノ一個人、〔按損害ヲ受ル者、甲ノ一個人ハ〔按損害ヲ与ル者、〕對シ、償金ヲ要求スルルルル如キ
 兩件アルニ方リテハ、之ヲ法院ノ判定ニ任スル

當然ナルヘキヤ、將政府ノ判定ニ任スル當然ナ
 ルヘキヤ、○或ハ此ノ如キ時ニ於テ、若シ法院ノ
 職域ヲ傷ハサラント欲シテ、專ラ之カ為ニ謀ル
 ルハ、自ラ政府ノ職域ニ害ナキ能ハサルニ非ス
 ヤ、或ハ又此ノ如キ判定ヲ以テ、專ラ政府ノ職掌
 トナシ、法院ニ托セスシテ、全ク政府ニ托スルル
 ハ、凡、何等ノヲ以テ、定メテ法院ノ判定スヘキ
 一ト為スヘキヤ、○凡、此ノ如キ諸論起ルルハ、政
 府及法院ノ職域、遂ニ至當ヲ失ハントスルノ恐
 アリ、何者、或ハ法士ノ議論ニ由テ、私人ノ為ニ謀

務テ法院ノ職域ヲ寬濶ニナサント欲シ、或ハ
 憲法ヲ制定シ、或ハ議論ノ可否ヲ裁定シテ、當然
 法院ニ屬スヘキ職掌ヲモ、尚奪フニ至ルコトアレ
 ハナリ、
 前條論スル所ノ如キハ、純乎タル私權利ト、純乎
 タル公權利ト、交互關係シテ、宛テモ原因ト成果ト
 ノ如クナルカ故ニ、遂ニ此ノ如キ紛論生スルニ
 至ルナリ、去レ私權利ニ屬セルコトハ、法院必ス之ヲ
 裁判シ、公權利ニ屬セルコトハ、政府必ス之ヲ裁判ス
 ヘキヲ以テ、當然ノ原則トナスヲ、常ニ忘失セス

シテ、之ニ謹遵スルキハ、此論ヲ決スル、蓋甚難キ
 ニアラス、凡、私人ヒスクスヨリ償金ヲ取ラント
 要スルキハ、ヒスクスハ必、私法院ノ裁判ヲ受
 クヘキコト、固ヨリ當然ナリ、按ヒスクスハ、國家ニ
屬スル物ト雖モ、唯是
國家ノ私有ニシテ、殆、私人ノ
所有ト相同シケレハナリ、 綴令私人ヒスクス
 ノ為ニ、損失ヲ受ケン時ニアラスト雖モ亦然リ
 トス、其他一私人、他ノ私人ヨリ償金ヲ要求セラ
 ル、キハ、亦必、私法院ノ裁判ヲ受クヘキコト、固ヨ
 リ當然ナリ、綴令一私人官吏ニ列スルキト雖モ
 亦然リ、○但、私人訴訟ヲ以テ、償金ヲ要求セント

欲スル時ト雖、若、被告者ノ所行、故ナラニ私人ノ私權利ヲ毀損セシニアラス、被告者唯政府ノ官吏ナルヲ以テ、特ニ私人ニ對シテ、其職官當然ノ權柄〔按〕職官ニ就テ、授与ヲ施行セシテ、審理ノ時ニ於テ、明瞭トナルハ、是等ノ一ハ、通例容易ニ明瞭トナルナリ、決シテ原告者ニ償金ヲ與フルノ理ナキヲ以テ、此ノ如キ訴訟ハ、總テ之ヲ黜ク可シ、然ルニ若、官吏或ハ誤リ或ハ故ニ其職權ノ區域ヲ超過シテ、私人ノ私權利ヲ毀損セシテ、審理ニ於テ明瞭トナルハ、私法院務メテ原告

者ヲ保護シ、其毀損セラレタル私權利ヲ回復セシメ、而テ原告者ヲシテ、被告者ヨリ相當ノ償金ヲ取ラシムルノ權利ヲ有シ、且、其義務ヲ負フナリ、凡、此ノ如キハニ臨ミテハ、法士必、唯私法ニ就キ、及ヒ私法ニ依テ、判定スルナリ、○然ルニ又時トシテ一私人ノ所行ヲ判定シテ、或ハ私法ニ背戾セラル所行ト為ス者アリ、或ハ唯公權利ノ施行〔按〕私公權利ノ施行ト為スナリ、實ニトナズ者アリテ、其判定二種ニ分カル、一ナキニアラス、而テ此ノ如キヲ判決スルハ、固ヨリ政府ノ職掌ナレハ、

其判決ノ權、宜シク政府ノ掌中ニ有ル可シ、即、是
 法院ノ職權ハ、必、法院ノ掌中ニ有ル可キト、全ク
 同一理ナリ、○此ノ如キ争論ハ、而私人ノ間ニ起
 ラス、却テ政府ト法院トノ間ニ起ル者ナレバ、必、
 争論審理（按）審理スルハ、當否ヲ以テ、之ヲ裁判ス可
 シ、去レ、此裁判タルマ、常理ニ於テハ、決シテ難キ
 ニアラス、凡、此ノ如キヲ裁判スルハ、必、政府ノ
 職掌ナレハ、政務官、若クハ、政務法院ヲシテ、之ヲ
 掌ラシムヘシ、私法院ハ、此裁判ニ預ルヲ得サル、
 固ヨリ當然ナリ、但、時アリ、政務官ノ專恣ヲ預防

セシガ為ニ、憲法ヲ以テ常法外ノ處分ヲ為ス
 アルハ、此限ニアラストス、
 〔第四〕國家ニ属セル權利ハ、國家之ヲ施行スルヲ
 以テ通則トス、去レ、其中ニ就テ、一個人ニ属セル
 公權利、及、一個人ノ意ニ任セテ行止スヘキ公權
 利（即、兼テ公義務ヲラサル者ヲ云フ）ノ如キハ、此
 通則ヲ以テ概論ス可ラサル者ナリ、故ニ此類ノ
 公權利ハ、次第ニ私權利ニ近似スル者ト云フ可
 シ、
 例ハ、第一類ノ公權利（按）前條一個人ニ属セト

八、貴族ノ權利、パイルト、（按）西院議員ノ權利、兵役ニ奉事スルノ義務、一種ノ職官ヲ奉承スヘキ義務（按）諸職官中ニ就テ、臣民必奉セサル可ラサヲ云ル者アリ、即、邑官、或ハ之ニ類スル官等ヲ云フ云

七、（按）是等ハ皆私人ニ又第二類ノ公權利（按）前條ノ意ニ任セテ、行止者トハ、元選者（按）立法府ノ議員ヲ選擇スルニ、兩回選擇ノ法ヲ用フル國アリ、其第一回選擇ヲ掌ル者、元選者ト云フ、（按）ノ發言權利、言シテ、其意ヲ述（按）選擇ノ商議ニ發、國家ノ官吏ニ選擇セラレ、ノ權利、新聞ヲ公布スルノ權利、公事ノ集會ニ列スルノ權利等是ナリ、（按）是等亦公權利ナレ、兼テ公義務ケナサル

○

以上諸權利ハ、純乎タル公權利ノ性ヲ得ル、從テ、其國權ニ屬スル、亦愈、嚴ナル、然ルニ、此諸權利、若、私權利ニ近似スル、キハ、法院之ヲ保護スヘキ、最モ當然ナル、ミナラス、且、選擇ノ自由（按）負フ選擇スルノ自由ト云フ義ニシテ、選擇者タル者、絶テ政府ノ為メニ壓制セラレ、ミナラス、唯衆議ニ得ルヲ自由ニ及、出版ノ自由ヲ保全スルカ如キニ至テハ、必、法院ノ保護ナカル可ラス、但、政務法院專ラ此諸權利ヲ保護スルハ、更ニ良法トナス可シ、

第五 儘又公私相混淆スル制度、及、法アリ、此制度

ト法トハ、例ハ、猶其一足ヲ私法ノ區域ニ留メ
 他ノ一足ヲ國法ノ區域ニ入ル、カ如ク相似タ
 リ、是ヲ以テ、此制度及法タルヤ、政府ノ管轄ニ属
 スル部分ト、及法院ノ管轄ニ属スル部分トヲ以
 テ、綿密ニ區別スルコト殆難シ、今特ニ左ノ諸件ニ
 舉ル者、即是ナリ、
 (甲) 邑會、ゲマインシャフ及公事ノ會社ニ於テ、此ノ如キ制
 度及法殊ニ多シ、而テ公事會社ノ如キ者、古時ハ
 全ク私法ニ属スル者ナリ、近今ハ大ニ公法
 ニ係レル者トナレリ、凡、邑會所有權利、或ハ促償

負債ノコトヨリ生スル爭論ノ如キハ、私法ニ係レ
 ル者ナルカ故ニ、邑亦法院ノ保護ヲ受クル權利
 ヲ有スルコト、又他ノ一私人ニ異ナラス、而テ此ノ
 如キ爭論、邑ト一個人トノ際ニ起リ、或ハ邑ト國
 家トノ際ニ起ルニ論ナク、此理ハ總テ相異ナル
 コトナレ、○但、邑ノ所有ハ元來全ク公衆利益ノ為
 メニ備フル者ナルカ故ニ、政府其處分ヲ指令ス
 ルノ理ニ於テモ、純乎タル私事ヲ指令スルノ理
 トハ全ク相異ナリ、故ニ政府公衆安寧ニ著意シ
 其權ヲ以テ、之カ處分ヲ指令ス可ク、且、若シ此所有

ヨリ争論ノ起ルアルキハ儘又其權ヲ以テ之ヲ
 裁斷スルコトアルヘシ、○二邑若自己ノ權力ノ區
 域、或ハ道路橋梁ヲ修繕スヘキ義務等ニ就テ互
 ニ争論ヲ生レタルキノ如キ、之ヲ審理裁斷スル
 ハ、政務官ノ職掌ナリ、而テ若政務法院ヲレテ之
 ヲ裁判セレムレハ、更ニ良好トス、但道路橋梁修
 繕ノ、專ラ私人ノ掌ル者ニ係レハ、乃此例ニア
 ラス、其他一邑内、若クハ一會社内ノ衆員ト寡員
 ト、事ノ可否ニ就テ争論ノ生スルニ方リテハ、其
 事當然國家ノ管轄ニ属スル者ナレハ、政務官若

クハ政務法院宜シク之ヲ裁判スヘク、其事當然
 私法ニ属スル者ナレハ、私法院宜シク之ヲ裁判
 ス可シ、○公事會社ノ編制、并ニ創立、解散等ハ勿
 論、縱令純乎タル私會社ノ編制、創立、解散等ト雖
 凡、其事公衆ノ為メニ利害アルヲ顧思スルコト必
 要ナレハ、則チ必政務官若クハ政務法院ノ管轄ニ
 属スヘシ、例ヘハ證書會社〔按卷之六第十八款ノ
 臨監ノ章ニ出ツ、〕
 如キハ、縱令私會社ナリト雖モ、必其證書ノ實ニ
 確信ナルト否トヲ顧思スルコト緊要ニシテ、且、又
 獨、政務官若クハ政務法官能ク之ヲ顧思スルニ

堪ユ可シ、但私會社ニ於テ、此ノ如キ一ノ緊要トナルハ、甚々罕ナルノミ、

〔乙〕身分ノ關係ルスタンデスヘモ、亦公私ノ二法ニ分属ス、例ヘハ出生ノ兒童ニ就テ争訟起ルニ方

リ、其兒正出〔按〕公然婚構セル夫婦ナリヤ、將私生間ニ生ルセシ男女ノナリヤヲ審判シ、及父ノ子ニ

於ケル關係、親族互相ノ關係、并ニ其族黨〔按〕例ハ母族、伯叔甥姪及、其等階如、親族中ニ等階ノ區別ヲ等ニ就テ起レル争訟ノ類ハ、實ニ私法ニ属スル一ナルヲ以テ、法院ノ掌ルヘキ一、固ヨリ當

然ナリト雖モ、彼インデゲナート〔按〕各人出生ノ地ニ於テ得ルノ

權利國民權利〔按〕國事ニ關スル權利ヲ云、及邑民權利〔按〕邑事ニ關スル權利ヲ云、ニ就テ起レ

ル争訟ノ如キハ、公法ニ属スル者ナルカ故ニ、必ス政務官若クハ政務法院ヲシテ之ヲ掌ラレムル

ヲ良法ト為ス、但此争訟若唯出生ノ正私〔按〕正出云、ヨリ起レル争訟ノ餘事ナルキハ、此例ニアラ

ス、○國民ノ身分、專ラ私法ニ属スル者ナルキハ、〔按〕中古ノ世ハ殊ニ此ノ如クナリキ、某私人ハ當ニ

此身分ニ属ス可レト云ヒ、或ハ當ニ彼身分ニ属

此身分ニ属ス可レト云ヒ、或ハ當ニ彼身分ニ属

ス可シト云フ争訟ハ、從來ノ制度ニ由テ、必ス法院
 之ヲ裁判スルヲ掌ル、去レ、身分若ク專ラ國憲ニ関
 シ、公法ニ属スル者タルキハ身分如何ノトヨリ
 起レル争訟ハ、必ス政務官若クハ政務法院ノ裁判
 ニ属スヘキト、固ヨリ當然ナリ、例ヘハ、高賈ノ身
 分ハ、私法ニ關シテ法院ノ裁判ニ属シ、貴族ハ、帝
 ニ門閥ノ平民ニ起ユルノミナラス、又國家政令
 ノ事ニモ參預スルヲ得ル國ニ於テハ、身分如何
 ヲヨリ起レル争訟ハ、必ス政務官若クハ政務法院ノ
 裁判ニ属スルナリ、

〔丙〕産業ニ係レル權利
 フトエグニス、ハ産業ヲ營
 ムヨリ得ル者ナルカ故ニ、必ス私法ニ属スル者ナ
 リ、去レ、儘公衆安寧ノ為ニ謀リテ、私人ニ此權利
 ヲ與ヘタルキニ於テ、若ク此權利ニ就テ裁判ヲ要
 スルトアルキハ、政務官若クハ政務法官之ヲ掌
 ル可シ、

〔丁〕後見ノ權利
 キフルムビト、モ亦、公私ニ法ニ涉
 ル者ナリ、此權利ハ、元來親族法ニハミリ、及シ私法
 ニ属スト雖モ、後見ノ務ハ、又公義務トナル者ナ
 リ、是故ニ例ヘハ、後見ヲ命シ、或ハ免スルト、後見

人ニ某事務ヲ許可スルヲ、及保任ノ辨解ヲ為サ
 シムルヲ、并ニ政務官常規ニ從テ、後見入ヲ管督
 監察スル等ノ諸事ニ於テハ、決シテ唯正義公直
 ノ旨ヲ守ルノミヲ以テ、本旨ト為ス可ラス、必又
 公衆ノ利害ニ著意スルヲ要ス、故ニ苟クモ法ノ
 區域ヲ超過スルハ許サスト雖モ、必俱ニ便益適
 宜ヲ旨トシテ、處分スルヲ眼目ト為サ、ル可ラ
 ス、○是ヲ以テ近令ニ至リテハ、便益適宜ノ處分
 ハ、政務官ニ屬スル所ノ後見事務官ドホニ屬スル所ニ
 委テトスルトナレリ、甚良法ト稱ス可シ、

〔第六〕刑法ト、警保官ノ懲戒法ト、相異ナル所以ハ、

既ニ上卷卷之七第九款ニ於テ論說セリ、近令各國共ニ

刑罰憲法ゲストヲ以テ、此二法按尋常ノ刑法

云、ノ區別ヲ詳定セリ、

譯者曰、本卷首尾事理殊ニ了解シ易カラス、疊

々思フ彈スト雖、尚恐ラクハ誤謬頗多カラシ、

他日間隙ヲ以テ、再ヒ訂正ヲ加フ可シ、讀者請

フ之ヲ諒セヨ、

大井潤一 校

國法汎論卷之八下終

國語
 卷八
 音
 省

